**…民話と神話のはざま…**

民話　神話

文化　地域

**太陽とカラスにまつわるはなし**

**ねらい　：**同じモチーフのはなしをくらべ読みしてみることで、さまざまな地域の民話や神話を味わう。

**対象　　　　：**小学校中学年以上

**所要時間　：**３０分～

**準備　　　　：**３つの民話を数分印刷しておく。

**進め方　 　：**

1. ３人のグループをつくる。
2. １人１つの民話を印刷した紙を配る。（３人は別の民話をもつことになる。）
3. それぞれの民話を読み、味わう。
4. １人ずつ自分の配られた民話を２人に向けて語る。
5. 読んでみた感想、聴いてみた感想、３つの民話について、太陽のイメージ、カラスのイメージなどを語り合う。

（発展）

①自分の興味あるモチーフについてどのような民話があるのか調べてみる。他の人と共有する。

②自分の興味ある地域、行ってみたい地域にはどんな民話があるのか調べてみる。他の人と共有する。

③身近な人で民話を知っていそうな人をたずねてみる。なぜ知っているのか、誰からきいたのか、どんな思い出があるのかなど、たずねてみる。もし、身近な人で見つからなければ、民話を知っていそうな人を紹介してもらう。

**留意点　　：** （発展）③必ずしもすらすらと語れる人でなくともよい。この教材と同じモチーフでなくともよい。

コラム　《三本足のカラスとサッカー日本代表のマーク》

三本足のカラスは、サッカー日本代表のマークに起用されている。

三本足のカラスは「八咫烏（ヤタガラス）」と呼ばれている。「咫」は長さの単位、「八咫」とは、大きいこと、また長いことである。もともとは中国の神話の中の存在であったが、渡来人によって大陸の文化とともに「太陽のお使い」という扱いで日本に伝わったものといわれている。

３世紀頃、大陸からの渡来人が太陽とカラスをあしらった旗印を故国のシンボルとしていたという話も残っている。

ヤタガラスは、勝利の導き手、勝利のシンボルとして、サッカー日本代表のマークに起用された。

配布資料①

太陽とカラスにまつわるはなし

民話に登場するカラスは、太陽と密接なかかわりを持っていることが多い。その大部分が、カラスを太陽の使いと位置づけるもので、アイヌ民話、ギリシア神話、他にも、キリスト教圏、北米（ネイティブインディアン）、中国等、世界各地に同様の民話・神話・伝説が残っている。太陽とカラスのかかわりについて考えてみよう。

**①《ワタリガラスが日と月と星を盗んだ話》**　　アラスカ　クリンギット族

　世界が始まったばかりの頃、世界に光はなく、みんな暗黒の中に暮らしていた。この世で最も知恵持つ者たるワタリガラスが、あらゆる獣と人間と植物を作ったのだが、彼は太陽と月と星を作ることができなかったからだ。

　ある時、ワタリガラスはナース川の岸に住む大族長が、太陽と月と星を杉の木箱に入れて持っていることを知った。ワタリガラスは近くの高い松の木の上に飛び上がると松葉に変わり、大族長の美しい愛娘が水を飲むコップの中に入った。娘は松葉ごと水を飲み、身ごもった。やがてワタリガラスは大族長の孫として生まれ、大変に可愛がられた。

　星と月と太陽は、美しい彫刻の施された木箱に別々に入れられて、床の上に置いてあった。孫は星や月と遊びたいと言って泣きやまず、祖父がそれを取り出して渡してやると、煙出し穴から外に放り出した。それらはあっという間に天に散らばった。大族長は落胆したが、孫が可愛いので叱ったりはしなかった。次に、孫は箱の中の太陽が欲しいと言って泣きだした。あまりに泣いたので本当に病気になってしまい、祖父はとうとう太陽を孫に与えた。孫はしばらく遊んでいたが、パッとワタリガラスの姿に戻ると、箱を持ったまま煙出し穴から逃げ出した。

　ワタリガラスはナース川から遠く離れた場所まで来ると、闇の中で喋っている人々に話しかけた。

「おい、そこにいるのは誰だい。光が欲しくないか」

「いい加減なことを言うなよ。そんなこと誰にも出来やしないのに」

　ワタリガラスは美しい木箱を開けて太陽の光を放った。人々は驚いて逃げ出し、世界中に散り散りに広がった。

　それ以来、人間は世界中に暮らし、天には太陽と月と星があって暗黒になることはなくなった。

配布資料②

太陽とカラスにまつわるはなし

民話に登場するカラスは、太陽と密接なかかわりを持っていることが多い。その大部分が、カラスを太陽の使いと位置づけるもので、アイヌ民話、ギリシア神話、他にも、キリスト教圏、北米（ネイティブインディアン）、中国等、世界各地に同様の民話・神話・伝説が残っている。太陽とカラスのかかわりについて考えてみよう。

**②《三本足のからす》　埼玉県入間**

ある年の夏、武蔵の国ではひどい暑さと日照りが続き、田畑の作物はみんな枯れてしまった。それもそのはず、どうした訳かこの年に限って空には太陽が２つも輝いていたのだ。焼けるような暑さはそのためだった。

この話を聞いた都の天子さまも大層ご心配になり、誰か弓の名人を連れてくるように命じられた。2つの太陽のうち、どちらか１つがさしずめ魔物であろうから、これを射落とそうと言うことであった。

すると、家来の１人が天をつくような大男を連れてきた。この男は、飛ぶ鳥であろうが、どんな獲物も１本の矢で射止めてしまうという弓の名人であった。男は、大きな弓とこれまた大きな１本の矢を持つと、京の都を後にして武蔵の国へ向かった。

何日もかけて武蔵の国にたどり着いた男であったが、じりじりと焼けるような暑さと強い陽射しが男を襲った。男が歩いていると髪の毛に火がつき、またさらに歩いて行くと、今度は着ている服が焼かれるというような凄まじい陽射しであった。このため、男はとうとう暑さのために倒れてしまった。ところがちょうどその時、日が西の空に沈み始め、男は命拾いした。

男が目を覚ますと、それはちょうど夜が明けて、東の空から太陽が上がってくるところだった。そして今日も地平線から太陽は２つ昇ってきた。男は高い岡の上に立つと、どちらが本当の太陽か見極めようとした。すると、１つの太陽がその正体を現すかのように、男の方に迫って来た。

男は弓をひき、迫ってくる太陽に向かって矢を放った。すると、「ギャーー！！」という悲鳴とともに、太陽は落ちていった。太陽が落ちた先を村人が見に行くと、そこには山ほどもある大カラスが心臓を射貫かれ、死んでいた。そして、この大カラスには足が3本もあったのだった。

それからこの地を、魔物を射たことから射る魔と呼ぶようになり、これが入間という地名の由来だそうだ。

配布資料③

太陽とカラスにまつわるはなし

民話に登場するカラスは、太陽と密接なかかわりを持っていることが多い。その大部分が、カラスを太陽の使いと位置づけるもので、アイヌ民話、ギリシア神話、他にも、キリスト教圏、北米（ネイティブインディアン）、中国等、世界各地に同様の民話・神話・伝説が残っている。太陽とカラスのかかわりについて考えてみよう。

**③　≪三本足のカラス≫　　中国　漢族**

　カラスは、中国で太陽の使いとして崇められていた。カラスは大切な仕事を請け負った。 それは、なかなか昇らない太陽を背負って、天空近くまで運ぶことだった。 しかも、そのころの中国には、太陽が三つもあったのだ。これはなかなかの重労働で、そのためにカラスの身体は大きくなり、足も三本となった．

カラスはその三本の足の各々に一つずつの太陽をつかんで、毎日空に運び上げていた。ところが、太陽が三つも同時に空で輝いたのでは、世界は眩しすぎ、暑すぎて、人も動物も、そして植物も、とても暮らしてはいけない。川は干上がり、山野の木草は燃え出してしまった。

そこで、三つの太陽を順番に空に浮かべることにした。すると今度は、地上は夜も昼もなくなって、人や多くの獣や鳥たちは眠ることが出来ず、一方、梟（フクロウ）のような夜行性の者たちは、目を覚ますことができなくなってしまった。

皇帝も人々も、動物たちも、みな困り果ててしまった。とりわけ梟ときたら、この時のことを根に持って、いまだにカラスを目の敵にしているのである。

そこでカラスは三つの太陽に問うた。「毎日三回も重い太陽を空まで運ぶのはとても大変だ。どうしたものか」。 すると、一つめの太陽は、それをカラスの職務怠慢だと言って怒って喚き散らしたので、カラスはこの太陽を消してしまった。二つ目の太陽は、「それなら俺は明日からずっと天の上に居続けよう」と答えた。カラスはこの太陽も消してしまった。三つめの太陽は、明日からは自分の力で空に昇ることを約束した。カラスは，この三つ目の太陽だけはそのままにすることにした。

これでやっと中国にも夜と昼の区別ができ，昼は程よい明るさと暖かさになり，そしてなにより，太陽は自分で空に昇るようになったのである。

**【参考文献】**

埼玉県国語教育研究会編（２００５）「読みがたり 埼玉のむかし話」日本標準。

日本民話の会/外国民話研究会編訳（１９９７）『世界の太陽と月と星の民話』三弥井書房。

星野道夫（１９９６）「森と氷河と鯨-ワタリガラスの伝説を求めて-」世界文化社。